

酒癖の型御覽

湯口龍淵の子に忠兵衛あり。酒癖ありて酒杯もてば亂れずといふ事無し。豆腐好きなりければ、酔うて己が家に歸るや必ず豆腐を命ず。此の時湯豆腐を用意し置けば釜豆腐食はねばならずと暴れ、彼の時釜豆腐を出せばのどろ豆腐をこそと言ひ罵るに、其の妻工夫を凝らし、大工をして鍋に格子を造り飲めしめ、一時にくさくの豆腐料理を揃へて待ちぬ。斯くとも知らぬ忠兵衛は例の如く酔うて歸るや直ちに豆腐を命ず。のどろは不可なりと突き返せば早速湯豆腐を持ち出し、それも嫌ひと叱ればうんどん豆腐を持ち來る矢繼速。案に相違し、暫し呆れてありしが、ぐつと妻を睨めつけ「斯くては産を保つべきやうもなし、如何なる豆腐をも直ちに持ち出すといふ奢りは怪しからぬ沙汰」とぞ暴れける。罵り盡してなほ心満たぬ時は、皿、小鉢、何にてもあれ、手近の物をとりて投げしが、たゞ其の缺け損するを惜しといふ心は失はず、常に庭前の池水めがけて飛ばすは、實にも生酔の本性とや云ふべき。あまりに噂高ければ、或日戸村城代忠兵衛に、其の酒癖振り見たしと所望あり、忠兵衛きつと座り直し「如何に支配なればとて、武士たる者に所望も品にこそよれ」と言ひ返し、忽ち座にある物取つては投げく、襖障子のわかちなく破り散らすに、城代もたまらず、おのれにツクき生酔奴の振舞と怒り起たれし折に、忠兵衛はつとばかりに平伏なし「先づ一と通り斯の如き物にて候」と挨拶いとも鮮かなりけり。

湯口椿平

横手には横手一流の奇言行はれ、着想人を感嘆せしむるものあるが、此の奇言奇行の開祖を湯口椿平となす。忠兵衛の子なり。椿平以後皆其の型を襲うて所謂横手味を出すを誇る。吉澤助左衛門翁幼き頃初めての年賀とて卵色の紋服に袴着けて廻る。湯口の門を訪るゝに椿平驚きたる顔つき鹿爪らしく「これはくカナリヤの年賀は始めての事」といふに、赤

面して逃げ歸りしと翁の生前よく語りては笑ひぬ。椿平或時曰ふ、我れ冠り物の儘戸村様の行列の前を切り得べしと。人皆其の過ぎたる豪語を嗤へども椿平甚だ自信あるものゝ如し。公園七曲りの下、根岸より川岸に出づる公園道路は近き頃まで人の宅地なりけれども、昔はそこに小路あり。一日戸村城代下に、下に「の聲を先にして根岸を通るに其の小路よりごろく」と行列前に轉げ來しはいと大なる西瓜にて、其の西瓜を逐うてども、一種の儘匂ふが如くに道を横切る者は湯口椿平なり。態の可笑しさに城代「椿平のうろたきを見よ」と腹をかゝへて笑はるゝを、始めて氣付きたる態して、ども、頭中こをかなぐり捨て「無調法仕りし」と平伏せし椿平には、もとより何の咎めも無かりしが、去る日の豪語を知る者のみは、あつとばかりに感嘆久しうしけり。椿平の後、瀧田新六、石井半平、赤尾關市兵衛等皆奇言奇行を以て鳴る。新六嘗て百合堀りに友を誘ふ。刻既に午後二時も過ぎければ其の友あまりに刻遅しと拒みし處「明日行く人さへあるべきものを」と答へけり。

根岸の狐狸

椿平の子に萬治あり。清懶と號して詩人なり。花道に遊びて八千代葎椿齡といひ、萬草萬木時に隨うて榮え節によりて枯るゝの妙を味得し、眞に風流人なるが、爐邊話題の人たるは正に不肖の子にあらず。湯口屋敷は牛沼の下にて、藪傳ひ崖傳ひ、野獸の通ひ繁かりしにや、萬治にかゝはる狐狸談多く、何れが實、何れか作り咄ともわかざれども、人より人に面白く語りつぎぬ。夜な夜な萬治々々と訪れ來るを窺ふに、狐が其の尾をもて戸を打ちては摩し、打ちては摩する音の斯くきこゆるなりけり。又、夜更けて伐木の音珍しからねば、月明に乗じて雨戸の節孔より隙見しけるに、狸の背を丸めて笹藪を走るなり。隙見してあれば笹藪の音なれども、目を閉づれば大樹の倒れかゝる響きなるこそ不審議なれ。此の外斯る咄の多かる中にいと興あるは、萬治の狐を愚弄せしといふ物語なり。或夜隣家にて鶏のたゞならぬ聲あり、今宵も狐の

襲ふなんめりと思ひつゝあるに、やがて湯口の庭前に、かさこそと物のけはひす。ひそかに窺へば、狐の大いなる鶏をくはへ来て埋めむとするにて、土掩ひかけて後振りかへり見ながら何處ともなく立ち去りぬ。萬治は入口より忍び出で、庭にめぐり入り、其の鶏をば堀り出し、穴へは屋根石一つ埋め置きて部屋に歸りしが、しばしありて再び鶏の騒ぐ音きこえこたびは隣の主人も目を覺し、狐逐ふ聲しきりなり。また、戸の隙より窺ひ見るとも知らぬ狐は、物におびえて四方見廻しつゝ庭に逃げ入り、以前鶏埋み置きにし處に來りて、急ぎ土堀りのけしが、穴より現れしは鶏にはあらぬ屋根石なるに不審しげにぞつと見おろしてぞ考へ込みし。翌る日隣の主人萬治に對ひ「昨夜も悪狐に見舞はれ、二度目には目を覺せしが一羽は空しく盗み去られぬ」と語るより、萬治は「これならずや」と獲物を示す。「こは忝し」と受取らむとするを「いなとよ、我が鶏を奪ひしは狐よりせしなり、狐がとりに來るならば返しませめ、君は狐よりこそ受取るべけれ」とて返さず。いろ／＼笑ひ論じての末、話とまり、鶏は二人にてわかちけるとなむ。

赤尾關市兵衛

近き頃奇を稱されしは赤尾關市兵衛なり。明治二十七年の大洪水には家も土藏も水に浸されて顔色をかへつるが、人ありて大水にてお困りと慰むるに「湯にて無きこそ幸ひ」と言ひ返せしは名高し。子供好きにて、童等も亦翁を慕ひ其の道行くを見ては走り寄りたるが集る童等を樂しげに見おろす翁は、やがて一人々々の小さき頭を「あびらうんけんそわかツ」と喝しつゝ、びしやり／＼と打ちたゞき、たゞかれし子は満足して去り、また新しく次なる頭は翁の掌の下に在りぬ。急ぎの道には翁もたまらず、片手の買物をば路面におろし置き「あびらうんけん」びしやり、「そわか」びしやりと兩手を働かす事も珍しからざりけり。昔おもへば懐しや、我も頭をたゞかれて祝はれ馴れし一人なり。翁若き頃、友某と連れ立ち、釣すとて横手を離れ角間川街道を進みしが、道の邊に祠ありしを鳥居の前に立ちはだかりて立小便をなす。之を待ちつゝ佇み

し友、ふと横手の方を振り返るに、見よ、横手城は火なり。「お城は火事なり、市兵衛續け」と駈け出せば、さすがに翁も驚きて走り出す。石町、關根橋も夢の間に越え、碓橋に足踏みかけてきつと横手城を見あぐれば、あら不思議、火も煙も見えず。友は、亂暴者の市兵衛と行を共にしたればこそ狐づれに、してやられもすれと、之に懲りて以後二人行く事絶えぬ。されば翁たゞひとり或日大戸川に釣を垂る。腰の魚呑、何やら音ありと、そつと覗けば狐ありて獲物を盗むなり。憎さも憎し、悟られぬやう、肘は動かさず手頃の石ひとつ指尖にて堀り起し、魚呑に再び音するや、さつとばかりに殴り付けたるに、ねらひ違はず眉間に當り、狐は悲鳴をあげて逃げ去りぬ。此の時、ふと想ひ起せるは、狐は必ず報復を忘れずといふ事なり。見廻すに、川邊に石地藏一つ立ちておはす。急ぎ笠とりて、其の地藏菩薩に冠せまつり、蓑をとりて着せまつり、釣竿も魚呑も、赤尾關市兵衛に露たがはず作り換へ、おのれは近くの藪に伏し隠れけり。此の時彼方物騒しく、うかゞへば、狼凡そ十疋ばかり此方を指して急ぎ來り、例の狐は其の殿にあり。先頭の一疋は勢ひ込んで、彼の竿持ちて佇む、地藏菩薩にとび懸り、笠の上よりさつと噛み付く。石の堅さ、いかばかり痛かりけむ、狼はもんどり打つて落ちしが、怒り立ちし狼共は、一齊に、彼等を誘ひし狐を逐うて去りぬ。

吉澤助左衛門

鬪牛は、横手の牛川原、安田原、仙北の蛭藻沼、野荒町などによく行はれ、金澤のぶち、大屋のすだれ等いふ猛牛の人氣は素晴しきものなりけり。其の事絶えてはや三十年に近し。里言葉に「べごの角突き」と稱へ、其の催しある時は辻々に牛二疋角突合せて勇しく押し合ふさまを繪とし張り出しけるが、此の繪を描けるは吉澤助左衛門翁なり。殊の外鬪牛を好み、またよく牛を描きて眞に迫りぬ。いかなる上手の描ける牛も、翁の目に觸れては、脚の踏みやう、尾の振りさまなど何か至らぬ節の必ずある習ひなりしが、英一蝶の牛を見し時のみは「一蝶牛を識る」と感嘆久しうしけり。翁或日後架に入

りて刻を經れども出で來ぬ事のあり、屋敷に働き居ける若い衆、病ひや起りつると心にかゝりて、そと節穴よりのぞけば、兩手の拇指人差指を牛の角の如くに開きて、左右を突き合せ「赤勝て、斑勝て」と鬪牛の真似に興じつゝ後架を出づるを忘れしなりき。何事にも凝り性にて、事に心を向けては更に餘念無く、俗を離れし逸事尠らず。或日門邊の柿の樹にのぼりて、一句成れば柿の果一つちぎりとるを自ら掬となし、二句三句忽ち成れば籠には句の數ほど紅き果ころげ入りぬ。さて四句五句とおひくゝ苦吟となり、はては、手をさしのべしまゝ動かず、釣瓶落しの秋の陽なれば容赦もなく西山の蔭に入れども、手をさしのべしまゝ悠然たる樹上の句三昧。

もう落つる葉も無し柿のまる裸

松 宇

松宇とは其の雅號なり。連俳に巧みにして超脱の趣あり、光風といふ人と二人して

江に覗く柳の白し霜の花

光 風

明日をも待たず大根引く音

松 宇

薪積だ家は富しと嘶して

光

蟲を這はせて作る古米

松

百姓も雪駄で通る橋の月

光

露の昇りて冷る裾風

松

翁は明治三十五年卒享年六十六。

一管の尺八

幕末の頃石川なにがしの嫡男某の才氣衆にすぐれけれども、遊藝の道に深入りせるが身の禍ひとなりて、石川總家の咎

めをうけ、生れし横手をよそに浪々の身ときまりぬ。憎からぬ子なれども武家の義理はつらや、其の親はせめて國の堺まではと下男をして送らせけるが、院内にて此の下男を返すに當り、われ身も魂も此の兩刀に縛らるゝ事耐へがたし、今よりは廣き現世を廣く渡るやう、丸腰になるべしとて、武士の魂たる刀を興へ、おのれは唯馴染みし一管の尺八を手に、行衛遙けき旅の空、律呂朗かに浮世の道、悟らねども悔い無く、さまよひ出でぬ。その後幾とせか經て、片野治兵衛京都御警衛のためのぼりし折柄、大阪のとある小路を通りしに、ふと目に觸れし尺八指南の看板は、正しく彼の石川某が名なり相違無しとは思へども、さすがに訪ひもかねつゝ通り過ぎ、歸國の後、某が親に斯くと語れば、不孝の子は咎めせず、それかと思ふ名を見つゝ訪ひもやらで歸りし治兵衛を怨じ顔なるも、人の親のまごゝろ。此の兩親、子を思ふ心の募れば沼山の上なる風吹きに辨當携へての遊山。國の堺に浮ぶ雲を眺めては、其の子の上に思ひを馳せけるとか。

醸す戀酒

用無き用を構へては家を出で、落し差しに頬冠り、雪駄のかねは、わざと取り棄てたる、これが若侍の忍び姿。その時、その時の美形に慕ひ寄る色の道、斯道に精出す事昔も今も變らざりけり。しも町なる某が娘お霜とて艶色双ぶ者無き女、つひに片野彌兵衛と割無き仲となり、共に手をとり城下を奔りしは安政二年の七月。こゝに追手は片野治兵衛、佐川七郎卒又藏を同伴して八月三日横手を發足、本莊酒田より越後村上城下に入りて探索し、連れ歸りしは十九日。身分違ひの戀路の故もて、同九月彌兵衛奉公退身の悲劇とはなりぬ。「君と寝やるか」の唄をその儘、治兵衛は戀知り、いづれ會ふべき秋風の寒さは覺悟の前にこそありけめ。又横手に「あべそく」と仇名せられし女あり。紫ぎれを好みて艶なる化粧、見る人思ひを焦さざるは無かりき。「あべ」とは「おいで」の意にて「そく」は「早速」の略、あべとし誘へば早速なびくが其の名の出づる處とぞ。御代革まる頃よりは、「清水の傍のおすみ」最も謳はれ、ついで「あんどんこ」なる美女、若侍達を騒がしぬ。西

瓜など賣るべう行燈持ち出で、町角に店出す姿を慕ひ、一夜の幸を射むものと、暗がり忍ぶお歴々も多かりしとかや。美貌も昔語り、戀はもとより夢の夢なれども、街燈にはお座敷歸りの袂なまめく昭和の夜、カフエに嬌聲沸く今の代には、また新しき代の人新しき戀酒醸すなるべく、石川五右衛門なんぞの知らぬ濱の眞砂ぞと微笑まれこそすれ。

争ひの町

明治の始め、六部ありて横手にさしかり、先づ山崎の藤の下に憩ひぬ。その頃藤の下には小さな祠數々並べるが、六部之を見廻して、一つ祠にまとも祀る術もあるべきに、斯くとは、此の町の人々、互ひに我を張り異を樹て、争ふなめりと語りぬ。昔は鳩溪平賀源内横手を訪ひし時、街路二日町今の榮にて二つに岐れ、一は大町となり一は四日町となるを眺め、町の地相を觀するに永久に二つに岐れて争ひ絶えじと言へりと。當るトひ者とならむとすれば凶き事を言へ。吉き事の豫言當る事いと稀にして、凶き豫言當らずといふ事無し。

落し物の匂ひ

近むかしの頃、なにがしの左衛門といふ武士あり、義太夫に凝りて外町の染太夫が許に夜毎の稽古通ひ。夜風涼しくなりまされば、殊更さわりの一と節身に泌みぬらむ、低聲に繰り返し蛇の崎橋まで歸り來つるに、折しも眞瓜西瓜の出盛り季節、下痢の氣味なりければ急に便意を催して堪へ難うなりぬ。あいにく紙一枚の持ち合せ無けれども家まで辿り着かむは覺束無し。困じ果てたるが、それよ、稽古本の最後の一枚は白紙なりけるよと、勿體無けれども聖天社觀音の片蔭に、人目を避けて用使を濟し、しすましたりと歸宅して臥しぬ。翌る朝、出入の肴屋薬つと片手に提げて訪れ「旦那様人に拾はれぬうち早う私奴が見つけしこそ幸ひ、大事のお落し物、タシカにお届け仕る」と件の薬つとを差し出す。身共

に心當り無しと答ふれども、いや／＼間違ひあらずと強ひて其の品置きて去りぬ。不審ながら兩手して開き見るに、あなや匂ひも高き黄金汁。添へたるは正しく前夜稽古本よりむしりとりたる一とひら、墨くろ／＼と「此品何方江參候共名前之方江御返被下度候此主なんの左衛門」。

譽れの大坪流

昔大江戸に天下の達人を揃へて馬術競べ、召されて集る其の中に、出羽佐竹藩横手の士小松忠藏といふあり。此の忠藏若き頃ひそかに江戸に出で、馬術を學び、横手に歸りて其の術を教へありけるが、たま／＼佐竹公のお目にとまりて月一回の御師範、毎月久府に出づるを習ひとせり。武は横手と謳はれし其の中にも、拔群の者として藩内より擇ばれ、今晴れがましや、芝愛宕山、馬の鼻突く大石階は登りに高く連るなり。首尾よく乗りあげなば武門の面目、まつた館様の御自慢にもなるべきなれども、急坂に一步の過ちある時は、愛馬と共に身は石階に碎くる覺悟勇しや。故里横手のはづれ、やはその里の八幡神よ護らせ玉へ、鞍を一重の上と下、人も馬も生死は神にまかせまつりし武士の華、手に汗握る觀衆の、しづまりかへる前を、さつとばかりに乗りあげけるが、さながら一片の木の葉風に卷かれて、斷崖の面を舞ひのぼるが如く、大坪流の玄妙をあらはして見事頂を極め、天下第二位の譽れを得ぬ。佐竹公御喜び限り無く馬鞭を賜ひて賞し玉ひ、また其の名は愛宕山上のいしぶみに彫られて、末の世かけて横手武士の譽れを示しぬと。

小松の松樹

維新の頃の小松忠藏、下僕を伴ひて東島海詣りしての歸り、岩崎川原にて其の下僕、若松二本根こじにして持て來にしが、之を庭前に植ゑて朝夕心にかけて、水呉れ育つるほどに、緑も深く年々に枝伸びて、庭の風情一としほ増しぬ。やがて

主家に暇取り、新坂なる生家に歸りし後も、主恩忘じ難く時折小松の家を訪ね、小松の家を訪ぬる毎に、今は幹も太やかに成木せし其の松の根に、手桶運びて水呉るゝ事昔に變らず。年経ちて其の下僕の子龜藏といふ者、また横手に出る毎に小松の家に立ち寄り、立ち寄りては必ず松に水呉るゝ事父に異らず。横町通れば美しき小松の庭の松、繁る枝葉の數も、下僕二代に互る情けの水桶には、其の數及ばじとこそ聞け。

薄葉助内

安田山傘松の下に石の地藏菩薩おはす。こゝは名も恐しき埋め塚とて、天保天明兩度の饑饉に餓死者を葬りし墓なりといふ。餓死者の多くは南部の者にて、食を求めて此の國に忍び入りけるが、此の國とても凶作にて、自ら餓ゑつゝ他に施す人のあるべうもあらず、迷ひくし末は、つひに屍を並木路の夜露にまかせぬ。慈悲も情けも先づ自ら生きての後の沙汰となり、其の頃他藩には米一俵も出ずまじきお塚お塚の御番物々しき慣ひ。天保四年の凶作に、横手の武士薄葉助内、佐川形左衛門兩人、仙北善知鳥の境口吟味として置かれける折、時しも十月六日の夕まぐれ、降りつゝの雲にまぎれて米を背負ひ、南部に越えむとする者共あり。曲者待てと近寄れば、其の一人しばし神妙に見せかけ、油斷を見濟まし棒振りあげ脳骨砕けよと助内の頭を撃つ。不意をうたれて氣も遠くなりゆくばかりなりしが、はつと氣を取直して彼の曲者に組付き、揉み合ひ押し合ひ闘ひけれども、對手は剛の者にてつひに組敷かれ、既に危く見えし處、助内速くも小刀を抜き持ち、下より突きあげ天晴れ勝を得ぬ。此の勇しさ聞えて、館様より御典醫を下され、二百日の御手當て。頭上の傷痕其の勇を示して語り艸とはなりぬ。

小鷹狩右近組下横手給人 薄葉助内

去秋凶作に付他領越米吟味被仰付候處十月六日夜南部御境善知鳥口におゐて徒者數人見當棒に而手向候付佐川形左衛門

組付候得共足を被引倒棒に而被打候故其方駈付双物を犯し手疵を負ながら相手の一人脇下突通し倒候處形左衛門茂首筋を切掛候に付其余人數逃散候由混亂中無類之手配拔群之働候依之爲御賞貳人御加持銀子五枚被下候

正月

とあれども、公けの届出でと事實との間には些かの相違あり、形左衛門のうたれしといふ事無かりしが如し、形左衛門にも貳人御加持持、但し銀子は無かりき。

横手郷土史 終

郷土史

昭和八年八月五日印刷
昭和八年八月十日發行

編輯人

橫手郷土史編纂會

事務所

秋田縣平鹿郡橫手町田中町一七

發行人

橫手町役場

秋田縣平鹿郡橫手町

印刷人

濱野英太郎

東京市麴町區紀尾井町三番地

非賣品

(行印所張出町麴社會式株刷印京東)

640
83

